

「勝利を賜る神」 6月4日(土) 林淳三先生を偲ぶ会

この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを着るとき、次のように書かれている言葉が実現するのです。「死は勝利にのみ込まれた。死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか。」死のとげは罪であり、罪の力は律法です。わたしたちの主イエス・キリストによってわたしたちに勝利を賜る神に、感謝しよう。わたしの愛する兄弟たち、こういうわけですから、動かされないようにしっかり立ち、主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦勞が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずですよ。

(コリントの信徒への手紙一 15章 54～58節)

本日このように、約一年前となる昨年6月8日に、天に召されました林淳三先生を偲ぶ会を開催することが出来ましたこと、まことに神に感謝いたしたいと思います。特に、林先生が短大の学長時代に建てられましたこの5号館のチャペルで、先生を偲んで、ご遺族、先生を慕う多くの方々、そしてご関係者と、この偲ぶ会、そしてこの追悼礼拝を開催できますこと、まことに感謝すべきことと思います。昨年はコロナ禍で家族葬であったと聞いておりますので、先生もさぞや天の御国でお喜びになっていることと思います。

私は今関東学院大学の宗教主任で、この室の木キャンパスのチャプレンだから、この追悼礼拝を執り行っていると思っていらっしゃる方ももしかしたら少なくないかもしれません。しかし実は正確にはそうではありませんで、私にとりまして、林先生は、自分が初めて学校で専任教員として働き始めた時の最初の上司でございました。1990年代半ばのことですけれども、倉沢先生も現在理事を務めておられる彰栄学園の保育福祉専門学校で、専任の教員として、また宗教主任として私は働き始めました。そして当時の学園長・校長が林先生でございました。そしてまた誤解を恐れず言えば実質理事長的な存在であったと思います。そして実際その後理事長にもなられました。当時、私は30そこそこの若造でしたので、世間知らずでご注意も受けましたが、林先生からは非常に多くの薫陶を受けました。

先生のご功績については他の方々がお話しされますし、倉沢先生がまとめられておられるので、私は基本控えたいと思いますが、もし私の立場から少しく先生のことをお話しさせていただくとすれば、それはキリスト者以上にキリスト教を大切にされていた、キリスト教教育をとっても大切にされていた、その意味ではまさにキリスト者そのもののような方であったということです。

高等教育、専門教育を受けて知識や技術を得た人たち、特に対人的な仕事に就く人たちが、どのような心をもって人と接するか、ということを先生はとても深く考えておられた方でした。

そして、聖書に基づく神の愛に根ざした人間性を培うことがとても大切であるということを繰り返し述べられた方でした。それは短大学長時代も同じであったと思います。

私は今日お話しするにあたり、彰栄学園が年2回発行している『彰栄』と題された新聞に一通り目を通しました。前期（春学期）に出される号には大体林先生の入学式の式辞が出ているからです。

ほぼ終始一貫して先生が言われることは、多少の表現の違いはありますが、キリスト者であるかないかに関係無く、聖書の教えに基づく人間愛が必要であり、それによって人間性を培うことが肝要であるということです。そして建学の精神である「愛と奉仕」の人になっていただきたいということです。関東学院であれば、人になれ奉仕せよ、を心に刻め、ということでしょう。三つほど短く引用させていただきますが、

「専門学校の弱点と言われる人間教育面をキリスト教に基づく建学精神により補うという、まさに理想的な職業教育が行われています。」（1989年、平成元年の入学式、就任時のもの）

「その教育の基本は、キリスト教人間観による神の愛に根ざした個人の尊厳、人格の完成、使命感を学ぶことでもあります。」（翌年、1990年入学式）

「キリスト教教育とは、キリストからの教育であり、キリスト教の教えをもとにして聖書から多くの人間観を学び、人間性を養うことを目的としています。」（1996年入学式）

このように述べておられます。そして、林先生ご自身が、よほど特別なことでも無い限り、礼拝に必ず出席され、一番前の席で熱心にお話に耳を傾けておられました。そしてまたこれは特に、多分私が証言しなければなかなか伝わらないことかもしれませんが、先生は礼拝で外部から牧師を呼ぶと、必ず礼拝の前と後に私と一緒に接待に出てきてくださいました。そ

して自ら謝礼をお渡しされていました。原則最初から最後までいました。途中抜けるということはありませんでした。もちろん、これは専門学校だったから、ということも多分にあると思っています。しかし、礼拝は宗教主任の役目だからと任せてしまって、礼拝だけに来て、その場で挨拶程度で済ませるといってもやろうと思えば、出来たと思いますが、そういったことは絶対になさりませんでした。人を選ぶということもされなかったと思います。今日は理事の牧師だから対応して若い牧師の時は来ない、といったことはありませんでした。そういったところに、先生のお人柄が出ているのだと思います。

普段の礼拝がそんな感じで、現在のことは存じませんが、私がいた頃は、春は始まってすぐ天城山荘に一泊で新入生研修会に行き、11月には創立記念礼拝を行い、12月には霊南坂教会でクリスマス礼拝、春には卒業式の約一週間前に卒業式とは別に、三崎町教会や早稲田教会で卒業研修会を行っていました。そこまでしてキリスト教教育を大切にされ、学生の心に、聖書の言葉が生きるようにと、最大限心を配った指導者でございました。

もう一つだけ彰栄新聞から引用をさせていただきますが、

「我々人間に与えられた人生は一度だけである。このただ一度の人生を価値あるものにしたものである。それは究極的に社会・人類のための奉仕である。…聖書に基づく建学精神を心のよるべとして、良き保育者、介護者となり得ることを信ずる者である。」(1998年入学式)。

このように入学式でお話しされたわけですが、林先生御自身が自らこの言葉を生きられた、体現された方でした。教育において、研究において、そして学校経営において、その一つも欠けることなく、まさに三位一体、全てにおいて並外れて秀でたかたちで、人に、社会に奉仕をされた方でした。関東学院の校訓、「人になれ奉仕せよ」、彰栄学園の校訓、「愛と奉仕」をまさにそのまま具現された方であったということです。

ところで、両校の校訓に共通して「奉仕」という語が入っています。「奉仕する」、とか「仕える」という言葉は、もともと日本語では、下の位の者が上の位の者に奉仕する、仕える、という当たり前の意味しかありませんでした。これは広辞苑を引けばその名残が見られません。

しかし、聖書は違います。そういった限定がありません、さらに、上の者が下の者に奉仕する、仕えるというのがむしろ本質です。ですから、社会に奉仕する、世に仕える、というふうにも使われるようになりました。明治時代になってキリスト教が再び入って来てそういう意味合いが含まれてくるようになったわけです。ですから、トップレベルの人が奉仕する、という言葉を使います。

つい最近、イギリスのエリザベス女王のプラチナジュビリーのことが日本でも盛んに報じられていますが、エリザベス女王が、即位 70 年目を迎えるに当たって、人々に奉仕する誓いを新たにされた、と報じられています。キリスト教の国では、国の代表が奉仕する、という言葉が普通に使うわけです。彼女は国のトップ、また英国国教会のトップでもあるわけですが、キリスト教の国では聖書に基づいてそのように言うことができるわけです。

これは、日本ではあり得ません（ネットで検索してもこの意味では出てきません）。良い悪いではなく、違いとして受け止めていただければよろしいかと思えます（ただし、天皇は元首ではなく、憲法上「象徴」です）。

いずれにしても、林先生は神から与えられた類いまれなるその賜物、才能を生かし、人々に、社会に**奉仕された**わけです。研究と教育と学校経営と三拍子揃ったかたちで、一つも欠けること無くそれぞれが傑出したかたちで、ということです（「偲ぶ会」だからと誇張していません）。

最近プロ野球の世界では、「怪物」とか「ビッグボス」といった言葉が使われていいいますが、林先生はまさに「怪物」かもしれませんが、しかし「ビッグボス」というのは当てはまらない、最上級にして、「ビッグエースボス」、あるいは「グレイティストボス」、という表現になるのだと思います。

そしてその「グレイティストボス」がそれぞれの学校の校訓の通りに、奉仕の人生を歩まれた、ということです。自ら教えたことを自ら体現された、ということです。そして、神が、ここまでよくぞやった、私の元に来なさいと定められた時に、先生は地上の生涯を終えられ、天に召されました。

キリスト教は靈魂不滅という考え方ではなく、死んで新しい体を与えられる、と考えます。

神話論的な記述ですが、創世記によれば、人は、神によって、土の塵から作られ、命の息を吹き入れられて、生きる者になります（創2：7）。そして、この肉の体は死ねばまた土に戻ります。しかし、神にある人は、霊魂だけが死なずに永遠に生きるというわけではありません。罪人（つみびと）たる人間は全存在的に必ず死にます。しかし、肉の体の代わりに、霊の体を与えられて蘇り、永遠に神とともに生きる、というのが聖書の信仰です。

新しい、永遠に朽ちない衣を与えられて、人は神と共に永遠に生きる。そのように今日の聖書には書いてあります（コリ一 15:54）。キリスト者以上にキリスト者たる人であり、生涯奉仕の人であった林先生は、そのようにして神のもとに移されたのであります。

林先生は超人ですが、人間ですから、死に打ち勝つことは出来ません。しかし全能の神に出来ぬことは無い、神は死に敗北しない、神が林先生に「勝利を賜った」、ということですから（コリ一 15：57）。

林先生は神と共にあります、そして私たちの心の中に鮮明に林先生が生き続けています。そして先生の仰る声が聞こえてくるように感じます。君たちしっかりしなさい、わしの後を、わしを思いをしっかりと継ぎなさい、と仰っておられる、私たちは先生を失った深い悲しみの中にありますが、単に悲しむだけではなく、そのことを深く覚え、心を新たにしたいと思います。

今日の聖書の御言葉が語るように、「動かされることなくしっかり立ち、主の業に常に励む（コリ一 15：58）、＝奉仕に勤しむ。先生の意を汲み、微力ながらも、先生から受けた薫陶を生かし、与えられているそれぞれの場において、心を尽して為すべき務めに励む、それが先生が一番喜ばれることであることを、今日改めて深く心に覚えたいと思います。

祈りを捧げます。目をつぶって祈りの言葉に心を合わせてください。

命の源なる主なる御神、

あなたによって命を与えられ、あなたの元に召されていった一人の師を覚え、本日、私ども、この場に集うております。「主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな」。かつてヨブはこのように言われました（ヨブ 1：21）。全ては全能の父なる御神の御旨のうちにあります。残された者にはつらいことです。地上において、顔を合わせ語り合う日々、顔を仰いで教えを受ける日々、そういうものは完全に失われてしまいました。しかし、今林先生は、苦しみも悲しみも無い御国において安らかであることを覚えます。そのことを覚えて慰めを得させてください。それによって私たちの心を、御国に向けさせてください。再び会える時が来るという希望によって生きる力を与えてください。先生の生き方と教えを胸に、与えられた時を精一杯生きることを得させてください。今日のこの偲ぶ会でご奉仕される全ての方々のわざを祝し、守ってください。この会を企画され周到にご準備された方々のわざを深く顧みてください。この会で行われる全てことをあなたの御手に委ねつつ、主イエス・キリストの御名によって御前にお捧げをいたします。アーメン。